連載
映画から
見えてくる
世界

第11回

自民党選挙のうらおもて

『選挙』について

木下 昌明（映画評論家）

ことしは春から選挙まっ盛りの観がある。現実の選挙は、日がな一日名前連呼の騒音ばかりでうんざりなのだが、想田和弘のドキュメンタリー『選挙』は実におもしろい。そこでもうんざりするほどの名前連呼だが、その裏側も一緒にみえるから飽きることがない（何しろ「三秒に一度自分の名前をよぶ」のが鉄則だってこともこの映画で知った）。それどころか、選挙をとおして日本の救いがたさもみえてくる。ドキュメンタリーにもこういう切り口があるのか、とわたしは感心した。

それというのも、この映画の最初の字幕に「観察映画」とあるように、想田が一人で監督・撮影・編集をやってのけ、一つの小さい選挙運動の経過を「観察」に徹して追いかけているからだ。それもナレーションや説明のテロップをはぶき、インタビューもしない（撮影しながら相手にボソボソと尋ねるぐらい）、音楽も一切なしで、選挙戦に携わる人々とは一定の距離を保ち、それでいて芝居の黒衣のように密着して撮りつづけたものだ。

このような撮影方法が可能だったのは、想田が、映画の主人公となる山内和彦(40)と大学時代（東大）の同級生だった影響が大きい。山内はこれまで選挙に出馬する野心を抱い

ていたもののその機会がなく、東京の下町で切手・コイン商を営んでいた。それがひょんなことから川崎市の市議会議員補欠選挙（２００５年10月）で一議席を争うために自民党（公募に受かって）から立候補することになった。それを知った想田は、同級生の奮戦ぶりを映画づくりのチャンスとして記録しようと思い立った。そこでかれは山内とともに自民党の了承をとりつけ、自民党側も想田が山内の友人ということと、一人で撮影するということで気を許し、党のお歴々をはじめ後援会や事務所の人々もカメラの前に身をさらすようになったしだい。

この映画を撮る前まで、想田はニューヨークを拠点に映画づくりに励み、日本でもＮＨＫの美術館もののドキュメンタリーをつくっていたが、名前はほとんど知られていなかった。そのことがかえってここでは効を奏したといえる。

しかし、映像技術の手腕には目をみはるものがある。カメラは、ひっきりなしに動きまわる山内を追いかけながらもブレることなく対象をきちんととらえて離さない。その上に山内の選挙シーンばかりでなく、ちょっと小休止でもするかのようにいっけん無関係な線路ぎわの立ち飲み屋とか路地裏とかぎゅうぎゅう詰めの通勤電車とか、よくみかける街の日常風景も挿入して楽しませてくれる。それがスナップ写真のようで味わい深く、小津安二郎の映画でもみているような気分にさせられる。

では、映画のトップシーンはどこからはじまるか――開設したばかりの事務所の道をへだてた夜の駅頭、そこで山内は名前入りのタスキをかけ、一人でポスターとのぼりを立てて、マイクを設置し、やおら名前を連呼する。山内に頭を下げられた帰宅を急ぐ人々は、この人は何？とけげんな表情で会釈したり、子どもたちが物珍しげに寄ってきたり。そんな出だしに山内の孤独なたたかいぶりがうかがえて、先が案じられてくる。しかし、それは思いすごしで、つぎの日、ちゃんと自民党の衆議院議員が付いて団地での演説に協力し、二、三の注意も受ける。さらに別の日、今度は山内の妻が、会社から休暇をとって付いてくれる。それも初めはセーターにジーパンと気軽ないでたちで、路上で短く演説する夫のそばで所在なげに立ちつくしている。そんな彼女が、夫には「妻」と紹介されていたのに、事務所をしきっている人から「家内」とよぶように指示されて不満たらたら。それでも一日々々と慣れ、選挙カーにのって「山内の家内でございます」と声を張り上げられるまでになり幹部たちからもほめられる。そんな彼女に、今度は「会社をやめるべきだ」といわれたとかで、彼女は夫と帰宅の車中で「総理大臣にでもなったら

やめてやる」と憤慨したりする。カメラは、こういった夫妻の私的なやりとりまで容赦なくとらえていて興味がつきない。その上に、かれらが急きょ間借りした雑然とした六畳間に押し入り、候補者の裏の生活にまで光をあてる。テレビがいまにもつぶれそうなダンボール箱の上におかれているのが印象的だ。

この選挙戦のうらおもてをみていると、改めて選挙って何だろうと思えてくる。特に日本の政治を牛耳っている自民党陣営の選挙戦が、この小さなたたかいの映画からもよくみえてくる。それはファーブルの『昆虫記』と同じとまでいわないが、選挙戦の人々をまるで人間という「昆虫」でも「観察」しているようにカメラを介して冷静にとらえているからだ。では、そこから何がみえるか。

その一つ、自民党という組織は、いっけん組織や集団的なものの見方を嫌悪・排除して個人の利益追及や競争をあおっているようにみえるが、なかなかどうして、この選挙戦をみると、これほどがっちり組織固めに徹し、縄ばりを守る集団的思考を大事にしている党はないのではないかと思われる。

それが画面上でよくみえてくるのは、いざ事務所開きで支部幹部が勢ぞろいし、神主がおはらいをして、有名な党のお歴々が押しかけていざ出陣するときである。「先生」方は山内に「有権者に背を向けるな」とか「握手は相手の目をしっかりみてしろ」とか、かしましい。また、幹部たちが「先生」とつぎつぎに記念写真を撮ったりでにぎやかこのうえない。これは山内の選挙であるはずなのに、山内個人のものではなく、自民党という組織を守るための選挙となっていることがかいまみえる。山内にとって「有名人」になる手段であっても、党にとって、かれは単なる「コマ」の一つでしかない。そして、この運動を下からささえているのが、地元の年配の婦人たち。彼女らは事務所でチラシを折り、電話をかけ、党の手となり足となりながら、「うちはおじいちゃんの代から党員なんですよ」と誘るかのように話したりする。その彼女らから街のうわさ話は聞かれても政治の問題については一切聞かれない。

もう一つは、自民党がねらっている有権者の姿がみえてくることだ。何も知らない山内を議員たちが連れまわすところは幼稚園の運動会であったり、老人会のスポーツ大会であったり、秋の祭礼であったりと、選挙運動がその地域のさまざまな行事としっかり結びついている。伝統文化やレクリエーションのあるところ党の上から下まで議員がこぞって訪れ、一緒にラジオ体操したり、みこしをかついだり。「どぶ板選挙」については聞いて知っていても、やはり実際に映像でみると驚かされる。

みこしをかつぐ山内のいまにも悲鳴を上げそうな表情がおかしい。

ここに日本型選挙の特異性がみえてくる。そこには政治をめぐっての議論など入り込む余地がない。それは棚に上げて、一票のために候補者が有権者と一体化を演じることである。その最たるものが、通行人の一人一人と握手すること、うむをいわさず相手の手を握り、スキンシップによって思いを通わせようとする。

わたしは映画をみていて、ずっと昔のことを想起した。いまは亡き女優の望月優子が選挙に出たとき、選挙カーのなかから、わたしの住んでいる団地に向かって名前を連呼しつつ、しきりに「雨が降ってきました。ふとんを入れましょう」という政治とは無関係な呼びかけばかりしていたので噴き出したことがあった。このように民主主義のルールにのっとった選挙なのに、それをささえている根っこは、非政治的な日常的感性を表に出し、仲間意識を強調して情緒的に訴える土壌――これによって肝心のどんな社会をめざすかの政治論議を封じ込めてしまう。その意味で、山内が訪ねてきた同級生たちに、選挙の内情をあけすけに語っているシーンがおもしろい。山内は自分のケースをふまえながら、日本の選挙は「ムラ社会的なもの」と批判する。この「ムラ社会」を守るために組織は、一青年の野心と学歴（東大卒）を巧みに利用しながら怪物のようにのみこんでいくわけだ。

さらに興味深かった点は、小泉首相が応援にかけつけるシーン。そこでは小泉を一目みようと駅前は黒山の人だかり。待ちに待った小泉がさっそうと登場し、車上から手をふり、「よろしく」とよびかけると、黒山はわっとなる。まるで有名俳優のパフォーマンスのようだ（山内は二度握手してもらえたと喜ぶ）。しかし、ここには「政治」は存在しない。政治のことばはどこにもない。あるのはオーラのある人物への大衆の憧れの感情と（それとはうらはらの）火事場見物のヤジ馬根性といったもの。マスメディア（特にテレビ）がつくり出した人工的な「小泉劇場」である。こういう装置のなかで選挙がくり広げられる限り、それは単なるお祭り騒ぎでしかなくなる。その結果、政治は感性でしか受け止められず、オーラのある人物への「おまかせ」となり、政治そのものも腐敗していく。また、選ばれた者は、この非政治的土壌を利用して強権的にふるまうことになる。その先にあるのがファシズム社会である。

映画は選挙を介して、いまの危機を鏡のように映しとっている。問われているのは日本人観客一人一人。あなたは日本をどうするのか？

※東京・渋谷シアター・イメージフォーラムにて六月九日より公開。